

ミルトンのキリスト教的英雄観

杉 本 誠

ミルトンは生涯にわたって自分自身の英雄観を鍛え直し、再構築しながら、常にキリスト教的英雄観を追求しつづけ、究極的には完全な英雄の姿を神の御子キリストにおいて具現化した。小論では、ミルトンのキリスト教的英雄観の実践の過程を1640年代以降の彼の作品において検討しながら、「雅量」と「忍耐」の美德が彼の人生において、いかに重要な役割を果たしているかを整理してみることにする。

ミルトンは『教育論』（1644年）の中で、「学問の目的は神を正しく知る力を回復することにより、われわれの始祖の墮罪を修復することであり、この知識を通して神を愛し、模倣し、神の恵みに結びつくことによって、われわれの魂に最高の完成を成し遂げる信仰という真の美德を備えることにより、できるだけ神に似る存在になることである」⁽¹⁾と書いている。これは、教育および学問の目的が霊的な働きを重視するという、ミルトンにとっての「キリスト教的教育観」をあらわしている。

ミルトンの教育目標は、「青年たちに従順であることを教え、熱心に学ぶことと、美德を敬う精神を養い育てる」⁽²⁾ことであり、「課せられたつとめを正しく、巧みに、また雅量をもって果たし得る人物をつくりあげる」⁽³⁾ことであった。さらに、「勇敢な人間、国を愛する人間、神に愛され、後の世に名を残す人物になるという高い望みを抱かせる」⁽⁴⁾ことであり、この教育目標を達成するためには、人はヒロイックな実践的美徳を身につける必要があった。『教会統治の理由』（1642年）にみられる表現に従うならば、「心はあらゆる美德の中でヒロイックでなければならない」⁽⁵⁾ということである。

ここでミルトンが教育目標の中で掲げている「雅量をもって果たし得る人物」という「雅量」(magnanimity)ということばに注目する必要がある。ミルトンは『キリスト教教義論』（1650～1660年頃）の中で、「雅量は、富、利益、榮譽を求めるか避けるか、受けるか退けるかする場合に、われわれが正しく理解させられたわれわれ自身の尊厳に従って行動する場合にあらわれるものである」⁽⁶⁾と定義している。ここで言われる「正しく理解させられたわれわれ自身の尊厳」が典型的にあらわれた実例としてミルトンがあげるのは、旧約聖書におけるアブラハム、サムエル、

ヨブ、ネヘミヤ、ダニエルなど、神への従順の模範とされる人物や、新約聖書におけるキリスト、パウロの生きかたである。その実例の一つとしてミルトンが指摘するのは、真のキリスト者が自分自身の価値を評価する場合の精神であり、この説明のために彼が引用するのは、「貧しい境遇にある兄弟は、自分の高い身分を誇りとしなさい。富んでいる人は、自分が低くされることに誇りを持ちなさい」(ヤコブの手紙第1章9—10節)という聖句である。ミルトンは「雅量」の美德の前提として「正しく理解させられたわれわれ自身の尊厳」に従って行動することを、この美德の条件としている。しかもミルトンが考えているのは、この「正しく理解させられたわれわれ自身の尊厳」が、人間そのものの偉大性の概念ではなく、旧約聖書、新約聖書に登場する神への従順の模範とされる人物に対して、神の側から与えられる尊厳ということである。ミルトンの言う「雅量」は、人間中心的概念ではなく、いわば神中心的概念であると言えるのである。ミルトンは、他のルネサンス期の思想家の場合と同様に、「雅量」が「あらゆる美德の冠」であるとともに、彼にとっては神中心的概念であった。詩人マイケル・ドレイトン『イングランドの英雄的書簡』(1597年)の中で、「雅量」のゆえに神に近い存在を英雄と呼んだ。⁽⁷⁾ ミルトンは「受難」(1630年)の中で、キリストを指して、「人間には堪えられない、大いなる苦しみの極限で試みられたこのうえなく完全な英雄」(13—14行)と書く時に、人間を超えた神的なキリストの存在を表現している。『闘技士サムソン』(1671年)において、サムソンを「飾りを知らない英雄的雅量と天の活気で武装して」(1279—80行)とコーラスにうたわせる時に、ミルトンは「雅量」の概念と「英雄」の概念とを結びつけて、人間界を超越して神の世界に通ずる理想の人間像をサムソンに与えている。「雅量」はミルトンにとっては、神的な高みを内容とするところのキリスト教的英雄観を表現することばである。神の義のためのヒロイックな人生こそ雅量に富んだ生きかたなのである。ミルトンの教育目標は、キリスト教的な英雄観に基づく人間形成であることが明示されているのである。

ミルトンが教会攻撃に踏みきった最初の論争論文である『イングランド宗教改革論』(1641年)の中で、彼は国民教育の問題を取り上げて、「よき統治とは、国民に真の知恵と美德の訓練を成すことである。真の知恵と美德から雅量が生じ、これがわれわれの始めであり、至福の目的、つまり神に似ることなのである」⁽⁸⁾と書いている。「真の知恵と美德」に立脚する「雅量」と「神に似ること」とが、不分離のまま国民教育の目標とされている。ここにおいても、ミルトンのキリスト教的英雄観が指摘されている。

『第二弁護論』(1654年)の一節においても「自由であることは敬虔であり、賢明であり、正しくあり、節度を守ることである。一口で言えば、雅量に富み、勇敢であることである」⁽⁹⁾と書かれており、自由であることは雅量に富むことであることが明示されている。ミルトンは「知恵と雅量に富む人物だけが自由を望み享受することができる」⁽¹⁰⁾と言っている。人間は神により自由を与えられた。だが、この自由を享受するために人間は「知恵と雅量」を絶えず働かせる努力

をしなければならない。「知恵と雅量」を用いて、神から与えられた自由を守り、保持し、回復させるという努力を続けることこそ、神との正しい関係に立つことなのである。逆にこの努力を放棄した時に、人間は内的小おび外的暴政に支配され、神との正しい関係を失うことになる。このことは極めて契約的な考え方である。

『第一弁護論』(1651年)においてミルトンは、英国民を「神の似姿」である「正しき理性」を用いて、神の摂理をこの地上に具現しようとする英雄的な人々として提示する。この神の摂理とは「暴君のもとで奴隷状態にあったわれわれを、真実の意味の自由へと、すなわち神ご自身のもとへと、復帰させること」⁽¹¹⁾に他ならない。また、英国民は比類なき雅量をもって、武装した敵だけでなく「烏合の衆の迷信的謬見という内なる敵とも戦って勝利し、さらに多くの子孫のための解放者である名を獲得し」⁽¹²⁾、「英雄に特有の美德からだけ生ずると他の国家において考えられている企てに、国民が一丸となって取り組み、成し遂げてきた」⁽¹³⁾のである。「英雄に特有の美德」とは「雅量」を指し、それは英国民に「神が吹きこんだ王者である息」⁽¹⁴⁾でもある。

ここで注意しておかなければならないのは、ミルトンが「自由」を重層的に捉えているということである。英国民は「武装した敵」、すなわち「外なる敵」を打倒したのであるが、その一方で「内なる敵」をも打倒した。「外なる自由」とともに「内なる自由」をも回復したのである。「外なる自由」は武力だけで回復できるが、「内なる自由」は武力で回復されるものではない。「雅量」という「英雄に特有の美德」があってこそ初めて回復が可能となる。そして「内なる自由」が回復されて初めて「外なる自由」が真正のものとなる。「内なる自由」と「外なる自由」という自由の二重構造は一層精密化されて、ミルトンの後期の三大作品に受け継がれていくのである。

『第一弁護論』の中でミルトンは英国民の内にある英雄的資質を称えているが、初めから終わりまで英国民礼讃の書ではない。第12章の終結部近くになると、それまで論的サルマシウスを攻撃する一方で、英国民を弁護し賞賛するという作業を重ねてきたが、ここで英国民に呼びかけ、勧告する。そして、「自分自身の美德と勤勉と英知と勇気を頼みとして」⁽¹⁵⁾、「富と自由と平和と統治権とを望むように」⁽¹⁶⁾、また「あらゆる人々の悪口雑言をあなたがた自身の善き行ないによって克服するために、常に努力すること」⁽¹⁷⁾を勧める。なぜなら、神は「あなたがたを人生における最大の災い、美德にとって最悪の害である二つのもの、すなわち、専制と迷信から解放して」⁽¹⁸⁾下さり、「王者である息を吹きこまれたがゆえに、あなたがたは国王を捕虜にした時に、人類の先駆けとなって、ひるむことなく彼を裁判にかけ、判決を下した」⁽¹⁹⁾のである。ミルトンは英国民に向かって「あなたがたは平和のただなかであって、全人類のうちでも最高の勇気をもって、他の国々の人々を征服している敵である派閥争い、貪欲、富の誘惑、繁栄の陰にひそむ腐敗などを打倒するのだと、証あかしなくてはならない。勇気をもって、自分たちを隷従から解放したように、正義と節制と節度をもって自由を保持することが良い」⁽²⁰⁾と勧告する。そして、もし英

国民がこの勧告に従わないで墮落への道をたどるなら、サルマシウスが英国民に浴びせた「謀叛人、盗賊、反逆者、狂人」⁽²¹⁾ということばも自分としては真実として認めるしかない。彼らは「かならず神の怒りに触れる」⁽²²⁾ことになるだろうと結ぶのである。

すなわち、ミルトンは英国民の内に数多くの英雄的資質を認めてはいても、英国民を完成された英雄の姿では考えていない。なぜなら、ミルトンにとって「他の者にはるかにまさり、善性と知性において神にこのうえなく似たお方とはただ一人、神の御子キリストにほかならない」⁽²³⁾からである。ミルトンはキリストの内にこそ、完成された英雄の姿を見たのである。「神に似た姿」を保持するためには、英国民は神から与えられた「英雄に特有の美德」である「雅量」を働かせようと常に努力しなければならないのである。常に努力することとは、勤勉の内容とするところである。ミルトンは、人間は「勤勉と美德」とにより「真実の高貴さ」に至る⁽²⁴⁾と言う。「英雄に特有の美德」である「雅量」とは、神により吹きこまれた、王者の息であり、これは神からの働きかけによるものである。すなわち、神の御力と促しが、人間においては「雅量」として実体化される。これに対して、「勤勉」とは人間の側からのたゆみない働きかけを内包する語である。「雅量」と「勤勉」とが、人間を真実な意味で高貴な、すなわち、「神に似た」存在にすると言うのが、ミルトンの英雄観の核を成す概念となっているのである。このミルトンの英雄観は、きわめて近代的なものである。自覚と努力とによって英雄になる道が、すべての人間に開かれているからである。また、この概念はきわめて契約的であり、その意味でも近代的であると言える。

アリストテレスは英雄を「神のような人物」と定義したが、ミルトンもこの定義に基づいて『第一弁護論』においてキリストを叙述する。神にこのうえなく似たキリストは「暴君たちの支配下に人として生まれ、奴隷となり、受難に耐えるという代価を支払って、われわれに真実の自由を買い与えた」⁽²⁵⁾のであり、キリストは「われわれが真実の心をもって自由を得ようと努めることを大いに励ましている」⁽²⁶⁾と、ミルトンは主張する。キリストは「確かにわれわれの代わりに奴隷の姿に身をやつされたが、われわれの解放者としての精神を変わることなく持ち続けられた」⁽²⁷⁾のである。

『第一弁護論』に登場するキリストは、柔和でも、従順でもない。むしろ行動的であり、不屈の精神に満ちた解放者であり、敵を大胆に批判し、告訴し、非難し、警告を与えるのである。

キリストにより回復された自由とは、「内的自由だけでなく、政治的自由をも含めたものである」⁽²⁸⁾とミルトンは明言する。われわれは市民としても、キリスト者としても自由であり、それは「キリストの権威による」⁽²⁹⁾のである。キリストにより回復され、キリストにより権威づけられた自由は、「生まれながらにして神より賜った贈り物」⁽³⁰⁾である。従って、われわれは神ご自身のものであり、真実の意味で自由であり、ただ神からだけ賜った存在なのである。こうした論理において、ミルトンは「神の権威」に基づいたキリスト者的自由の原点を明確に指摘してい

る。

ミルトンのキリスト教的英雄観について『教育論』、『第一弁護論』と『第二弁護論』を中心に洞察してきた。ところでミルトンにとって、1640年代から50年代にかけての壮年期は散文時代に相当し、彼が「宗教的」自由、「家庭的」自由、「政治的」自由の三つの自由を掲げて散文論争に終始し、「真の自由」を主張した時期である。この時期において彼の精神を支配したのは、「正しき理性」に従うということであった。ミルトンは『第二弁護論』において、「真の実質を備えた自由は、外に求められるべきものではなく、内に求められるべきものであり、剣によって得られるべきものではなく、正しい規律と正しい行為の人生によって得られるべきものである」⁽³¹⁾と書いている。ここで「正しい」ということばは、「正しき理性」に従って、と解釈することができる。それならば、「自由でありたいと欲するものは……正しき理性に従うこと、すなわち、自分自身に打ち克つことを学ぶべきである」⁽³²⁾と彼は主張する。ミルトンにとっては、「正しき理性」に従って「節制」の人生を送ることこそ、真の英雄なのである。真の英雄とは、まさに「内なる神の戒めの声」⁽³³⁾に耳を傾ける人のことであった。

1640年代のミルトンは、神に従いつつ中庸の道を歩むという、いわば順境における「節制」の美德を中心とする生き方をしていた。それに対して、1650年代のミルトンは、両眼失明の身となり、彼の人生における大きな苦難と苦痛を体験した逆境のときであった。ミルトンの作品「ソネット第19番」、いわゆる「失明のソネット」が「忍耐」の美德を賞揚しているように、逆境における「忍耐」を深く経験させられたのである。

ミルトンは『キリスト教教義論』の中で、「忍耐」について「神の摂理、力、善に信頼して、神の御約束に従い、避けることのできない災いに対しては、これを最高の父の御心であり、われわれのために与えられたものと考え、平静に耐えることである」⁽³⁴⁾と、定義している。「忍耐」の美德は、逆境という試練においてこそ、神の意志に信頼する従順を指すのである。ミルトンは、この「忍耐」の美德を、彼の晩年における『失樂園』(1667年)、『復樂園』(1671年)、『闘技士サムソン』(1671年)の中で表現している。

たとえば、『失樂園』の中で罪に堕ちて樂園追放となる逆境のアダムに、天使ミカエルは「聞くことによって、真の忍耐を学びなさい。また、順境、逆境のいずれの時でも、そのいずれに対しても、中庸を重んずる心によって等しく耐え、慣れ、恐れと敬虔な悲しみとをもって喜びをやらせなさい」(XI, 360-64)と言う。逆境において、神への恐れと、敬虔な悲しみとをもって、中庸を重んずる心をもつことが「真の忍耐」なのである。「真の忍耐」とは、キリスト教的な忍耐であって、異教的な、ストイックなそれとは異質的なものである。アダムにとっては、墮罪の現実を悲しみ、それゆえに神を恐れつつ、自制の態度を保つことが「真の忍耐」であった。

ミルトンは『復樂園』において「模範的な英雄」⁽³⁵⁾であり、人生の「偉大な模範者」⁽³⁶⁾である主人公イエスが、サタンの執拗な誘惑の試練の中で、ヨブ的な、そしてキリスト的な忍耐の徳に

立脚しつつ、節制により厳然と誘惑を拒否し、「神の摂理への全き信頼」⁽³⁷⁾を確信しながら勝利する姿を描く。

ミルトンは『復樂園』の目的を「英雄にもまさるあの行ないを語らして下さい」(I, 14—15)と宣言しているが、『失樂園』においても、真にヒロイックであることは、「忍耐のよりよき勇気と、英雄的受難」(IX, 31—32)であることが強調されていることからして、当然、英雄詩としての『失樂園』を頭に置きながら、この作品も英雄詩として読まれるように構想している。ここで注意しなければならないことは、われわれが『復樂園』を読む場合、17世紀の市民革命という動乱の時代に生きたミルトンの姿を思いうかべ、とくに王政復古以後の逆境に生きるミルトン自身の心の中に、忍耐の占める部分がいかに大きかったかを知ることである。忍耐の美德は『失樂園』においては、アダムが天使ミカエルからその意味を教わったにすぎず、十分に展開されなかった。この忍耐を試す場は、樂園を去ってからあとのことである。この大作に続いて『復樂園』と『闘技士サムソン』を口述しなければならなかった真の理由は、まさに世における忍耐のたたかいという主題を選んだ場合、ミルトンは荒野におけるキリストの誘惑くらい適切な場面設定は他にあるまいと考えた。「マタイによる福音書」第4章、「ルカによる福音書」第4章に、その場面の原型がみられる。その場面設定のほかに、もうひとつミルトンが聖書から用いたのは「ヨブ記」の主人公ヨブの姿であり、忍耐の象徴であるヨブの姿が荒野におけるキリストの姿を規定している。

this man born and now upgrown,
 To show him worthy of his birth divine
 And high prediction, henceforth I expose
 To Satan; let him tempt and now assay
 His utmost subtlety, because he boasts
 And vaunts of his great cunning to the throng
 Of his apostasy; he might have learnt
 Less overweening, since he failed in Job,
 Whose constant perseverance overcame
 Whate'er his cruel malice could invent.
 He now shall know I can produce a man
 Of female seed, far abler to resist
 All his solicitations, and at length
 All his vast force, and drive him back to hell,
 Winning by conquest what the first man lost
 By fallacy surprised. (I, 140—55)

こうして生まれて今や成長したこの人（イエス）を、
 ここでサタンの前につれ出し、この人が神聖な誕生と
 気高い預言にふさわしい人物かどうかを示そう。
 サタンに誘惑させ、いまこそ無類の狡猾さを試させよう。
 叛逆天使の群れにむかって、
 彼の悪知恵を威張って自慢するのだから。
 サタンはヨブに失敗してからは、
 前ほどのうぬぼれかたをしなくなったかもしれない。
 ヨブの堅固な忍耐は、
 サタンの残酷な悪意がたくらむものを、すべて打ち負かした。
 いまこそ、ヨブ以上に、サタンの誘惑と絶大な力に抵抗し、
 そして最後には彼を地獄へ追い返し、
 かつて最初の人（アダム）が謀略に圧倒され失ったものを
 征服によって勝利できる人を
 わたしが女の子孫から産み出せることを
 サタンに知らしめねばならない。

『復樂園』が「ヨブ記」を意識して書かれていることは、第1巻における上記のような神のことばからも明らかである。イエスに対するサタンの誘惑が、「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない」（ヨブ記第1章8節）というヨブの試練とパラレルに置かれている。

また、『復樂園』の内容が主として、イエスとサタンとの対話から成り立っている点も、「ヨブ記」が主としてヨブとその三人の友人たちとの対話から成り立っていることと無関係ではない。サタンの誘惑は、多彩なことば「説得力のある雄弁」（IV, 4）を主要な道具にして誘惑するが、神の子イエスは偉大な伝統的な人物として傑出しており、模範的な英雄として中心的なルネサンス型の英雄であり、美德の「完全なあるべき姿」⁽³⁸⁾として、あらゆる条件を満たす人物であるからして防禦も完全である。

『復樂園』における誘惑は、福音書に記されているパンの誘惑、高い山における王国の誘惑、塔の誘惑の三つの誘惑によってわくづけられている。この誘惑は、ミルトンの時代のプロテスタント神学において、それぞれ、「肉の必然性」による誘惑、「世の欺まん」による誘惑、「サタンの暴力」による誘惑、と理解されていた。⁽³⁹⁾さらに、この三つの誘惑が、「ヨハネの第一の手紙」第2章16節の「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです」という、「肉の欲」（暴食）、「目の

欲」(虚栄)、「暮らし向きの自慢」(貪欲)に相当すると考えられていた。⁽⁴⁰⁾

ミルトンが同時代のこの神学に無関心でなかったことは、神が御子についてガブリエルに語る次のことばをみれば明白である。

His weakness shall o'ercome Satanic strength
And all the world, and mass of sinful flesh. (I, 161-62)

彼の弱さがサタンの強さ、全世界を、
そして罪の肉の力を、征服するであろう。

この神のことばが、「サタンの暴力」、「世の欺まん」、「肉の必然性」の存在を指示していることは明らかである。

しかし、ミルトンは、この三つの誘惑の中で、とくに第二の誘惑である「世の欺まん」、つまり王国の誘惑を中軸にすえた構成をとった。第2巻302行から第4巻393行までの、『復樂園』の主要部分がこれにあてられている。その前後にある第一の誘惑、第三の誘惑は、いわば導入部と結論部をなすものである。

さて、第一のパンの誘惑くらいではイエスの忍耐はくずせるものではないことを知ったサタンは、もっと本質的な誘惑を思いつく。彼はイエスが、この地上で「英雄的行為」(I, 216)や「偉大なるわざ」(II, 112)を意図していることを知っている。彼はまたイエスが、「もっとも偉大なるわざ」を達成するだけの「心の広さ」(II, 139)を求めていることも知っている。イエスのもつこのような英雄的な願望を、サタンが逆に利用して、イエス誘惑の手段としないはずがない。

そこで、サタンは第二の誘惑である饗宴と富と栄光とをイエスのために用意する。しかし、断食しているイエスは、「私の飢えとおまえとどんな関係があるのか。私はおまえの豪華な御馳走をいやしめ、見かけだけの贈り物を贈り物でなく奸計と考える」(II, 389-91)と言って厳しく戒める。サタンは饗宴の次には富という要素を抽出し、「富は名誉、友人、征服と王国をもたらす」(II, 422)と誘惑する。さらに、「あなたが大事の遂行を願うなら、まず富を得て財をつかみ、宝を積むがよい。私のことばを聞いて下されば、それも容易です。財宝も幸運も私の手中にあるのだから。有徳の人、勇者、賢人が困っていても私が支持すれば、その人は大いに富み栄えます」(II, 426-31)とサタンの高慢な富への賞賛とイエスを服従させようとする奸計とが表現される。だが、イエスは忍耐強く、「富を賛美してはならない。富は愚かな者には罠であり、賢い者には罠でなくても、厄介物である。富は賞賛に値する業を成すよう徳を励ますよりも、これを緩慢にし、鋭さを鈍らすものだ」(II, 453-56)と答えて、富の誘惑を敢然と拒否する。イエスは、ストア的な克己の理想を説き、

For therein stands the office of a king,
 His honour, virtue, merit, and chief praise,
 That for the public all this weight he bears.
 Yet he who reigns within himself, and rules
 Passions, desires, and fears, is more a king;
 Which every wise and virtuous man attains: (II, 463—68)

なぜなら、民衆のすべての重荷をわが重荷とし、
 これを負うのが王者のつとめであり、
 これが王者の名誉、徳、功績、賞賛となる。
 なお、自己の内面を支配し、激情と欲求と恐怖を
 克服する者こそ、王者というに相応しい。
 これがすべての賢くて、有徳な人が到達するところである。

と王者のつとめを高らかに唱いあげる。これらのことばの中に、われわれはイエスに投影されるミルトンの姿と、またミルトン自身、行動を起こす前に、「自らの精神を支配しなければならぬ」⁽⁴¹⁾ という思想を掲げていたことをみることができる。さらに、王者として相応しいつとめを、次のように説く。

But to guide nations in the way of truth
 By saving doctrine, and from error lead
 To know, and knowing worship God aright,
 Is yet more kingly, (II, 473—76)

だが、救いの教義によって、国民を真理の道へ導き、
 過失から遠ざけて神を知ることに導き、
 神を知って、神を正しく礼拝することが、
 王者らしいことである。

これらのことばは、ミルトン自身、幻滅を感じた晩年において、聖書に基づく謙遜な信仰と礼拝の実践こそ、真に価値ある尊いものであるという彼の確信を示している。

第3巻は、サタンの王国を支配することによって可能な名声ないし栄光の誘惑で始まる(III, 25—30)。だが、イエスの応答はサタンの誘惑に惑わされず平静になされる。イエスは、「地上の

栄光は偽りで、常に栄光に値しない人と、名声に値しない人に与えられている」(Ⅲ, 69-70) ことを指摘しながら、天における真の栄光と地上的な偽りの栄冠とを峻別している。真の栄光は、「神が地上をながめて正しい人を認めて賞し、彼を天国の全天使たちに知らせ、彼らが真の拍手をし、賞賛をくり返すときにおいてこそ」(Ⅲ, 60-64) なされるのである。この誘惑の過程においてイエスは、ますますヨブの姿に接近する。彼はサタンに対して、逆境において「もっともよく耐えるものこそ、もっともよく為し得る」(Ⅲ, 194-95) と告白するにいたる。

次いで、サタンはイエスを高い山へ連れていく(Ⅲ, 252)。これ以下がこの叙事詩の第二誘惑部の後半である。山の上でイエスは、古今に強大な国を見せられる。サタンがイエスの愛国心に訴え、アッシリアをはじめ諸王国の、とりわけパルティア王国(Ⅲ, 362-85)の武力を示して、イエスの使命であるイスラエルの解放を勧めるが、イエスはすべてに潮時があつて、神の摂理に委ねると言つてこのことを拒否する。誘惑の面ではサタンが口火を切りながら、実は逆に牛耳られていくのである。

第4巻では、サタンは単に辺境の一王国ではなく、豪華絢爛たる世界帝国ローマの政治的威光を見せる(Ⅳ, 44-66)。外面的な価値をもつ語、特に視覚語を多用しながら、延々とローマの様子を描く。まさに、内面的価値に目を向けるイエスと皮肉な対照をなしている。

そして、サタンはここでイエスにとっての最大の誘惑を考える。イエスは世俗の王には関心がなく、知恵にすぐれているから知恵で有名になれと奨める。そのうえ、サタンはアテネの学芸とその流れを語りながら、「あれはギリシアの眼、芸術と雄弁の母、有名な学者の故郷アテネで、快い静かなところへ客を歓待する都市で、市内にも郊外にも向学心を誘う散歩道や木陰があります」(Ⅳ, 240-43)と、ギリシア文化の賛美をする。そして、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、エピクロス、ストア、叙情詩、叙事詩、悲劇、雄弁と、ギリシア文化の本質が列挙される。これらは、まさにサタンの誘惑ではなく、ミルトン自身のギリシア賛歌を聞いているような気がする。誘惑らしいものはどこにも感じられない。だが、サタンは、イエスに、ギリシアの哲学を学べば、「あなた自身の内面において完璧な王者となるでしょう」(Ⅳ, 283-84)と語る。サタンの真意は、ギリシア文化が教える知恵と雄弁を活用して、「説得」(Ⅳ, 230)によって、世界を制覇することを教唆しているのである。イエスはそれに対して、自己の内部に閉じこもらずに、常に自己を開いて、「天なる光の泉から光を受け入れる者」(Ⅳ, 288-89)でなければならないと説く。人は自己の内面において完全になることはできない。もし、できると思うならば、それは最大の傲慢である。とりわけストア学派はこういう罪に陥った。彼らの有徳な人は「徳と呼ばれた哲学的高慢から、恥知らずにも、たびたび神と等しく、完全で全能の賢者を神の上におき、神も人も恐れず、富も快樂も、苦しみも痛みも、生も死も、あらゆるものを軽視する」(Ⅳ, 300-05)のである。さらに、彼らは「自らを知らず、まして神を知らず」(Ⅳ, 310)「魂について大いに語るが、しかし、すべて誤っている」(Ⅳ, 313)というわけである。だから、「このような学問

に真の知恵を求める者は、英知を見出さない」(IV, 318—19)と語る。しかるに、イエスは無用の知識を排して、神の啓示による知恵のみが真に大切であると説く。ギリシア人が知識のために知識を追求している様子は「海辺で小石を集める子どものように立派な物と思って、海綿のようにつまらない物を集めている」(IV, 329—30)のだと見抜く。

さて、サタンは星判断により、イエスの死をも予言して(IV, 388)彼を荒野に連れ戻す。激しい嵐と奇怪な悪霊がイエスを襲う。弱いイエスへのあわれみが印象づけられるが、弱いがゆえに一層、彼の平静さが強調される。夜が騒げばそれだけイエスの静けさと沈黙が、その信仰の深さを語る。イエスは嵐を鎮め、悪霊を追い払う。信仰と沈黙の勝利である。イエスはここに至ってはじめて、揺ぎない信仰に支えられ、全存在を神に委ねた上で、沈黙が力を発揮する。

ill wast thou shrouded then,
 O patient Son of God, yet only stood'st
 Unshaken; nor yet stayed the terror there:
 Infernal ghosts, and hellish furies, round
 Environed thee, some howled, some yelled, some shrieked,
 Some bent at thee their fiery darts, while thou
 Sat'st unappalled in calm and sinless peace. (IV, 419—25)

ああ、忍耐強き神の子よ、
 その時、あなたは身を避けるところもなく、
 ただ身じろぎもせず立っていた。脅威はそれとどまらず、
 地獄の悪霊と恐ろしい怨霊があなたをとりまき、
 吠え、叫び、わめき、
 火の槍をあなたに投げつける者もいたが、
 あなたは少しも恐れず、おちついて汚れない平静を保たれた。

このことばの中に、イエスはサタンの悪の誘惑に決して屈することのない神の子であり、「忍耐のキリスト」であるという認識と主張を感じることができる。

サタンにとってイエスは、「あらゆる誘惑に対して、非常に堅固な岩のように不動で、地球の中心のように強固であり、賢くて、善良な人間の中で、最高に位するが、それより優る者ではないことがわかった。今までにも、名誉や富や王国や栄光などを退けた人があったし、今後もあるだろうから。そこで、あなたが人より優る神の子として、神の声で呼ばれるほどの価値をもっているか」(IV, 532—39)どうか、残る手段は、イエスの神性を確かめることであると言う。かく

して、サタンはイエスを「聖なる都、エルサレム」(IV, 544—45)に連れて行き、一番高い尖塔の上に乗せ、軽蔑の口調で、「立てるなら、そこに立ちなさい。あなたでもそこに立つには技があるでしょう。私はあなたを、あなたの父の家に連れて来て最高の場所においた。最高は最上である。さあ、あなたの血統を示しなさい。もし立てないなら、身を投げてみなさい。もし神の子なら、無傷のはず。神は天使たちに命じて、あなたの足が石で打ち砕かれないように、いつでも手をのべて支えさすであろうと記されているから」(IV, 551—59)と誘惑する。これに対してイエスは、「あなたの神である主を試みてはならない」(IV, 561)と「ルカによる福音書」第4章12節の教えに、すべてを委ねることによって、長い誘惑に終止符を打つことになる。

ミルトンはイエスに、パン、女色、饗宴、富、名声、地上の王国の支配、ギリシア哲学など、あらゆるタイプの誘惑にあわせ、正しい克服の道を実践させ、そして正しい範例をわれわれの前に明示したのである。

また、真の英雄とは、平和な隣国を戦争で掠奪し、殺戮することが英雄的行為ではなく、かえって、苦難に耐えたヨブや、真理のために不当な死を蒙ったソクラテスこそ、真の英雄(III, 71—99)なのだと言う。ステドマンによれば、ミルトンは英雄像のコペルニクス的転換をおこなったのである。⁽⁴²⁾従って、「もっともよく耐えるものこそ、もっともよく為し、もっともよく従ったものこそ、もっともよく治める」(III, 194—96)ことになる。

この作品のイエスは、「謙遜と強き忍耐によって、罪と死を征服する」(I, 159—60)。このキリストの像が晩年のミルトンの姿と合致する。おのれの人生をふりかえり、ヨブ的な、そして「キリスト的な忍耐の美德」に立脚しつつ反省するミルトンの姿を見ることができる。

まさにミルトンは「忍耐」の美德を通して、完全な英雄の姿を神の御子キリストにおいて具現化したのであり、キリストにこそ、ミルトンのキリスト教的英雄観が明示されていると言えるのである。

注

- (1) Don M. Wolfe (gen. ed.), *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. II (New Haven: Yale University Press, 1973), pp. 366—367.
- (2) *Ibid.*, pp. 384—385.
- (3) *Ibid.*, pp. 377—379.
- (4) *Ibid.*, pp. 384—385.
- (5) C. P. W., Vol. I, p. 753.
- (6) C. P. W., Vol. VI, p. 735.
- (7) J. William Hebel (ed.), *The Works of Michael Drayton*, Vol. II (Oxford, 1932), p. 130.
- (8) C. P. W., Vol. I, p. 571.
- (9) C. P. W., Vol. IV, p. 684.
- (10) Frank A. Patterson (gen. ed.), *The Works of John Milton*, Vol. VII (New York: Columbia

University Press, 1931), p. 74.

- (11) *Ibid.*, p. 144.
- (12) *Ibid.*, p. 664.
- (13) *Ibid.*, p. 664.
- (14) *Ibid.*, p. 552.
- (15) *Ibid.*, p. 542.
- (16) *Ibid.*, p. 542.
- (17) *Ibid.*, p. 552.
- (18) *Ibid.*, p. 552.
- (19) *Ibid.*, p. 552.
- (20) *Ibid.*, p. 552.
- (21) *Ibid.*, p. 552.
- (22) *Ibid.*, p. 554.
- (23) *Ibid.*, p. 278.
- (24) *Ibid.*, p. 32.
- (25) *Ibid.*, p. 144.
- (26) *Ibid.*, p. 144.
- (27) *Ibid.*, p. 146.
- (28) *Ibid.*, p. 144.
- (29) *Ibid.*, p. 148.
- (30) *Ibid.*, p. 148.
- (31) C. P. W., Vol. IV, p. 624.
- (32) *Ibid.*, p. 684.
- (33) *Ibid.*, p. 588.
- (34) C. P. W., Vol. VI, p. 662.
- (35) E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto & Windus, 1964), p. 100.
- (36) M. H. Nicolson, *John Milton: A Reader's Guide to His Poetry* (New York, 1963), p. 328.
- (37) Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century* (Oxford, 1962), p. 414.
- (38) Tillyard, *op. cit.*, p. 100.
- (39) E. M. Pope, *Paradise Regained: The Tradition and the Poem* (New York, 1962), p. 162.
- (41) *Ibid.*, p. 163.
- (41) Tillyard, *op. cit.*, p. 256.
- (42) J. M. Steadman, *Milton and the Renaissance Hero* (Oxford, 1967), p. 52.